

石川県狼煙村における壊継界の可能性



～狼煙村 選定理由～

狼煙村は、「最果ての地」として多くの記憶を宿してきたが、能登半島地震により建物が倒壊し、過疎化と高齢化が進む中でその記憶も風化しつつある。瓦礫と化したかつての営みの痕跡の前に、この地を選定することは、単なる復興ではなく、壊れた素材に新たな命を吹き込み、地域の歴史と記憶を再生する試みとなる。

さらに当案では、可変的建築が時間とともに形を変えながら再構築を繰り返すことで、地域との関係性が徐々に編み直される。

固定された建築だけでなく、地域の記憶や営みに呼応しつつ成長する建築。それ自体が継承と創造の循環を体現し、風化ではなく新たな価値の創出へとつながる場となる。

～ダイアグラム～



10枚の不規則に並ぶ壁による不変的建築と、
その間に構成される可変的建築。
それぞれが持つ特性が相互に作用し、
建築そのものが「記憶と変化の交差点」となる。

～建築が起す影響～

【永続性と変化の共存】



不変的建築が「基盤」として存在することで、壊継界のアイデンティティが保たれ、時間の流れに埋もれない「拠り所」となる。一方で、可変的建築が変化し続けることで、時代ごとの記憶が幾重にも積み重なり、建築が時間を内包する媒体となる。

【物質と記憶の再解釈】



不変的建築が持つ「物理的な永続性」は、地域の歴史や文化を象徴する記憶の器となり、可変的建築が「流動的な場の変容」を生むことで、その記憶を時代に応じた形で継承・再解釈できる。これにより、壊れた素材が単に再利用されるだけでなく、新たな物語を織いながら存在し続ける仕組みが生まれる。

【風景との関係性の変容】



不変的建築が「地域の象徴」としての役割を持つ一方で、可変的建築が「地域との関係性を更新し続ける場」となることで、建築自体が地域住民の関わりの変化を反映する。季節や社会の変化に呼応して再構築されることで、地域との対話が継続的に生まれ、静的な遺産ではなく、動的な記憶の場となる。

【「壊すこと」の価値を深化】



可変的建築があることで、「壊すこと」が終焉ではなく新たな秩序を生む行為として位置づけられる。対照的に、不変的建築があることで、「壊れないもの」の存在が「壊すこと」の意味を浮き彫りにする。この二つが共存することで、壊継界の本質である「壊れることの肯定」と「再生の必然性」がより明確に示される。

phase1 一人暮らし



phase2 夫婦



phase3 親子3人



phase4 子に引き継ぐ

